

## 外国語教育

政府の動向に翻弄される英語教育とそれに対抗する諸実践の報告

犬上達也

### 1 今教研の特色

#### (1)参加者

1日目の参加者 一般教員 14名 学生 4名

2日目の参加者 一般教員 6名 学生 4名

ここ数年の傾向であるが、一般教員の参加率およびレポート数が伸び悩んでおり、残念ながら今回もそういった状況が見られた。参加される一般教員については、元大学教員をはじめとして高等学校教員、中学校教員を含め、やや固定化されてきた感がある。小学校外国語活動が導入されてから小学校教員の参加が見られた年もあったが、今回については残念ながら小学校教員の参加は見られなかった。また、学生の参加については1日参加することで「単位取得」に利点があるということで、研究にかける時間やアルバイトの関係から2日間の参加が厳しいという状況が見られた。

#### (2)レポート

①コミュニケーション英語Ⅰの授業～Lesson 4と発展学習の取組について

札幌東商業高校 野村健治

②主体的・共同的な学びを目指した授業実践～高校・英語～

北見北斗高校 徳長誠一

③教師も生徒も元気が出るあれこれ

南富良野中学校 犬上達也

④「英語技能主義」を乗り越え 言語意識の高揚を通して 思考と感性を育てる外国語教育の追求を

高退教・新英研 旭川大学高校 藤川 実

⑤戦争と英語教育－江利川新著に思うこと

加藤富夫

### 2 討議の柱

(1)外国語教育の現状と課題－生徒の学力の実態・外国語教育の現状と今後をとらえ、実践と研究を明らかにする。

①外国語教育の目的と全体構造を明らかにする。

②学習指導要領の問題点を実践的・理論的に明らかにする。

③評価方法を課題を明らかにする。

④小学校での外国語活動の実態と課題を明らかにする。

(2)外国語教育の内容と方法

①言語体系（音声・文字・語彙・文法）の教育内容と方法を明らかにする。

②言語活動（音声コミュニケーションと文字コミュニケーション）の教育方法と方法をあきらかにする。

③取り上げる材料の選定・掘り起こしを行い、その指導過程を明らかにする。

### 3 討議内容

(1)1日目

## 1)「戦争と英語教育－江利川新著に思うこと」

加藤富夫

東郷元帥など戦争を推進する側の例文や、戦争を遂行するための教育勅語の英訳が「新クラウン英和辞典 河村重治郎」三省堂や「新スクール和英辞典」研究社などに見られることを報告された。また江利川春雄氏が新著「英語教科書は〈戦争〉をどう教えてきたか」の中で、日清戦争から太平洋戦争まで戦争題材をたどっていること。鳥飼久美子氏が「英語・愛蔵の200年」の中で英語排斥と英語学習・研究継続の矛盾について指摘していることなどを報告された。

また、加藤氏は過去に出版され現在は絶版となっている英会話や英語学習に関わる冊子を持ち込まれ、参加者はそれらを興味関心を持って見ることが出来た。

討論では、戦争の状況により外国語の果たす役割が異なってくること、英語排斥の動きはあったが、敵国語の学習については戦争に勝っても負けても必要であること、戦争のために軍に従わざるを得なかった出版社や学者、執筆者がいた事も報告された。また、外国人として英語を学ぶ場合、ネイティブと同じである必要はないとの意見が出された。

## 2)主体的・共同的な学びを目指した授業実践 ～高校・英語～

北見北斗高校 徳長誠一

徳長氏は「主体的・協同的な学び」を目指した授業実践に関して、具体的実践事例を検討することで、その意義と課題を研究したことについて報告された。その中で、大学入試が高等学校基礎力学カテストや大学入学希望者学力評価テスト、さらにアドミッションポリシーに沿い、学力の三要素を評価する大学個別選抜導入されようとしていることに、授業の変革の必要性を述べられた。義務制の学校では多くの場合、校務分掌の中の「研修係」が授業変革の役割を担っているのに対し、高等学校の場合には校内の研修体制が整えられていない現状がある。高校生の授業に臨む態度として、与えられた課題には真面目に取り組むが、自主的に取り組む生徒が少ないという実態がある。そのため課題解決に向けた主体的・協同的な学び（アクティブ・ラーニング以下AL）が広がりつつあることが報告された。かつて高校での多くの授業スタイルが詰め込み式授業であったのに対し、変化が見えてきていること。「にぎやか、ペア、生徒によるいろいろな学習活動」が生徒の主体的・協同的な態度での学習が一定の効果をあげていること、しかしながら、活動主体に走ってしまうことの危険性も指摘された。

また、氏はALの知見を活かした授業実践が報告された。かつての「個人的主体性」を前提にした英語授業の限界が見えてきていることに触れ、高校生の「声」から授業デザインを構築する実践を報告した。その中で、Power Point、視聴覚機器を活用し仲間と協同の授業を展開することで学習意欲が向上することが報告された。また、氏の雑誌掲載記事からは、CDプレーヤーを使用せず、i-Tune⇒スマートフォン⇒語学プレーヤーで再生することで学習効果を上げていることが述べられた。授業準備の省力化としてPower PointやKeynoteなどのプレゼンテーションソフトを活用が勧められた。さらに、インターネットの英字新聞サイトからの記事を活用することで、情報の鮮度が生徒にとって能動的な学習の引き金になることも報告された。

3)「英語技能主義」を乗り越え 言語意識の高揚を通して 思考と感性を育てる  
外国語教育の追求を 高退教・新英研 旭川大学高校 藤川 実

藤川氏は3種類のレポートをまとめた報告を持参。

一つ目の『外国語教育の目的と日常的現実との乖離を読み解く言語力』の中で、教員に課せられた仕事の忙しさ、奥深さ、常にプレッシャーや時間に追われる状況、受験対策、英検対策、シラバス作成、CAN-DO リストの作成、更に教師自身の英検準1級以上の取得や TOEFL 受験の奨励など教師に限りなく求められる状況をまとめていた。また、文科省による指導要領解説の内容と現場に降りてくる指示・指導内容が合致していない事などを報告された。

二つ目の「『can-do リスト』の何が問題とされているのか」では、文科省の指導要領で言語観、言語活動観について評価に値する内容を示しながら、実際の外国語指導目標や指導方法の部分では、言語の側面を肥大化させた英語技能訓練に走ることが多くなる現実がある。そのような状況からは日本の生徒の言語意識、言語能力を高めようという真摯さや責任感は見えてこないと述べている。『can-do リスト』の策定目的に至っては文科省は「英語をはじめとした外国語は、グローバル社会を生きる我が国の子どもたちの可能性を大きく広げる上で重要なものであるとともに、日本の国際競争力を高めていく上での重要な要素である」と露骨に記している。『can-do リスト』に拘泥することなく、子どもたちにとって必要な学力とは何なのか、以前のスローガン「すべての子どもたちに外国語を学ぶ喜びを」を胸に現場で胸を張り、丁寧に追求することが今まで以上に求められているとまとめている。

三つ目の「言語形式が世界観を規定する」の中では、くするのか、されるのかは日本語英語の変換にとって重要な問題として、受動態における英語理解のポイントを述べている。

①日本語と英語の「主語」に対する考え方の違い

②「受け身表現」の作り方の違い

を指摘した。

また、「指導目標とすべき言語形式と言語意識の高揚」の中で氏は、

①文法用語の概念や機能を明確にする文法指導

②読解に役立つ文法指導

③生徒の言語感覚・言語意識を育てる文法指導

④音声指導

について述べている。

その中で①については、品詞の理解について日本語における品詞と比較することで概念が明らかになること、形式・携帯から機能、意味・表現内容理解へ発展していくことを述べている。

②については、読解のストラテジーやプロセスに従った指導や「直読読解」や「速読」のスキル指導について述べた。

③の中では、語の理解について意味指導から語義・概念指導に発展することの必要性、言語論のとらえとして記号としてのことばと実態、また言語形式・表現に込めら

れた発話者の意図や感情を理解することの重要性を指摘した。

④の中では、発音と綴りの関係（フォニックス）や音の変化、また世界で話されている英語の発音について「標準英語」とは何か、「USA Standard」を克服すべきであることを述べた。

#### 4) コミュニケーション英語Ⅰの授業～Lesson 4と発展学習の取組について

札幌東商業高校 野村健治

野村氏は授業をおいしくするスマイル・レシピの一つとして「私流記号付け速読プリント」の実践について報告を行った。

報告の中で、

- ① 英文テキストをダブルスペースで改行し、プリントアウトすること。
- ② 名詞（主語と目的語）に下線を引くこと。
- ③ 動詞を○で囲むこと。
- ④ 接続詞や関係詞を四角（□）で囲むこと。
- ⑤ 従属節を大括弧（[ ]）で囲むこと。
- ⑥ 前置詞句を（ ）で囲むこと。
- ⑦ 準動詞を半丸で囲むこと。
- ⑧ 英単語の下に日本語の意味を記入すること。

以上のようにポイントを8点上げた。

こうした方法に則った授業を展開することで、それぞれの句の固まりを意識しながら、英文を左から右に読んでいくことが出来るようになることの可能性を示すことが出来ていることが明らかになった。

#### 5) 1日目の討論から

特に「徳長レポート」についてActive learningを行う場合の留意点について論議がなされた。生徒の人数構成については目的によっても異なるが、一般的にはペアでの学習、紙芝居作成なら4名という報告がなされた。但し、グループについてはあくまで必然性が求められる場合のみに限定しているとのこと。

また、大学入試改革の流れにより、高等学校基礎学力テスト、大学入学希望生徒に対しては、学力評価テストの導入が言われている。またアドミッション・ポリシーに沿い、学力の三要素を評価する大学個別選抜導入の動きも見られる。そのため、高等学校でも授業のやり方そのものを変革する必要性が出てきているが、義務制学校と高等学校では研修体制に違いが見られる。義務制では校務分掌に「研修部」が位置づけられているところが多いが、高等学校では研修体制が殆ど整ってはいない。実態としては、与えられた課題には真面目に取り組むが、自主的に取り組む生徒は少ないという現状が報告された。

課題解決に向けた主体的・協同的な学び（Active learning）が、かつての詰め込み式学習から脱却し広がりつつある状況にある。

#### (2) 2日目

1) 教師も生徒も元気が出るあれこれ

南富良野中学校 犬上達也

犬上は小学校への外国語活動に関わる「巡回指導教員」として3年間の役割を終え、main English teacherとして中学校現場に復帰した奮闘について報告した。しかも、定年退職まで2年と迫った自身20年ぶりの学級担任という喜びと重責の中での実践を述べた。実践例として、

① 単元の中に登場する英文から生徒に暗記させたい英文を12～15文をピックアップし、Bullet（弾丸）Readingと称して生徒同士による練習、さらには暗唱につながる取組を紹介した。

② 英語の歌については、歌のリズムやメロディーの助けを借りて英語の持つリズムや発音を習得、日本語特有の拍のリズムを矯正し、子音結合の発音の矯正が図られることが効用として上げられている。生徒の声域に合わせることができるよう、自身のギター伴奏で取り組んでいることを紹介した。

③ 英語を学ぶ上で英文で書かれたユーモアを学習することは、英語的な考え方、感じ方、英語のセンスを養う上で重要である。そこで犬上は時折授業の中で紹介している英語のジョークについて取り上げた。

④ 英語はただ読み取るだけでなく、表現し発信することが求められる時代に変ってきている。中学2年生で学習する単元の中に「旅行を提案する」教材があることを利用し、生徒が地元をはじめとした「北海道旅行を提案」する英作文の取組を紹介した。

⑤ 中学校現場に外国語指導助手（ALT）が入ることが当たり前になっている現在、ALTの活用の仕方が改善されていなかったり、ALTとの打ち合わせについて時間がなかなか取れないということも多く耳にする。中学校でも小規模校であれば殆どの授業にALTが入る状況から、授業の流れに関する打ち合わせをできるだけ簡単に進める手順について紹介した。

また、授業内でまとめる英文や練習問題に国際情勢や国内問題、平和の問題を取り上げることの効用についても報告を行った。

## 2) 二日目の討論から

討論では実際の授業場面でのノウハウや英語学習の目的、敗戦と英語との関わりなどについてが話題となった。具体的には、

① 生徒に指名する場合に配慮すべき事。その際に生徒の間違いを指摘することで学習意欲を失うこともあるので注意が必要である。

② 会話を重視した授業では定着しない傾向が強いため、対策として英会話ドリルの活用が考えられること。

③ 英語学習の目的をあらためて考えてみたとき、本来外国語を学ぶにあたっては1カ国語だけでは問題があるとの声もある。しかしながら、世界の多くの地域で使用されている英語を学ぶことで、世界を知ると同時に日本を知ることができる。

午後の討論では、第二次世界大戦で日本が負けていなかったら現在の外国語学習はどうなっていたかという話題も話された。遠く離れたイギリスやアメリカの言語である英語については話せるようになりたいと多くの日本人が感じているにも関わら

ず、日本に近いアジア諸国の言語はそれほど学習意欲を持つ人が多くないと現実があることが話された。

#### 5 見えてきた課題

2日間の開催で外国語部会では参加者が固定化されつつあること、レポート数が少ない傾向が続いていること。学生の参加は近年増えているものの、1日目のみ、あるいは2日目の午前か午後のみという状況である。研究集会に参加することで単位認定がされるという学生にとっては現実的な問題ではあるが、学生の悩み、疑問に答える、より魅力ある分科会にしていく必要がある。